

ポストヒューマン文学における尊厳

カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』とマキューアン『恋するアダム』との比較

肖軼群

序論

本発表はカズオ・イシグロの『わたしを離さないで』(2005)とイアン・マキューアンの『恋するアダム』(2019)との比較を通して、二人の作家が提唱する「尊厳」の定義の抽出を試みる。両作品の主人公に当たる AI ロボット、或いはヒューマノイドのアダムとクローンのキャシーは、どちらも想像上の技術によって作られる人間と区別される「人工的存在」に該当する。このような「人工的存在」を主人公や語り手として設定された小説が近年多く書かれているが、現時点では『わたしを離さないで』と『恋するアダム』の比較研究がまだ見当たらない。両作品に登場する AI ロボット「アダム」とクローン人間「キャシー」との共通点から、本研究では 1.芸術創作による魂の証明、2.記憶への固執の 2 点を分析し、「尊厳」(“dignity”)というキーワードを提起する。

芸術創作による魂の証明

両作品に登場する人工的存在が自己を表出するために用いた手段として芸術創作を選んでいるが、この選択の背後には AI ロボットとクローンが共有する特徴、即ち生殖不能であることが潜んでいる。どちらも子を残す権利をあらかじめ剥奪されているため、感情の表出、ないし自分の存在の証となる何かを残すためには芸術の力を借りなければならない。持ち主チャーリーの恋人ミランダへの恋に目覚めたアダムは、俳句を書き続ける。アダムは、物事の本来の姿を映し出す俳句こそ、未来に唯一残されるべき文学形式と考えている。アダムが自分の感情をミランダに伝えるために俳句を使うのは、ミランダに自分の愛を本物の感情として受け取ってもらいたいからである。一方『わたしを離さないで』では、絵はクローンであるトミーが、同じクローンである語り手キャシーとの愛の証明として、ヘールシャム学校の管理者に提出するものである。両作品における俳句と絵は、最初に自分たちの愛情を人間に認めてもらうという、実利的な目的のために作られた芸術作品であることが分かる。

しかし芸術は、人工的存在たちが期待したような、伝達手段としての機能を果たすことはない。アダムの恋の相手であるミランダは、アダムの俳句に込められているのは「人間の経験」とかけ離れたものであると考えている。『わたしを離さないで』に戻ると、マダムやエミリー先生の前で自分の絵を見せようとするトミーは、まさに自分の魂と感情を絵を通して伝達しようとしたが、人間側はそれを受け取ることをしない。とはいえ、人工的存在たちの芸術創作が人間の考え方に全く影響を及ぼしていないとも言えない。物語の前半部で、チャーリーが最初にアダムの体に触れたときに、人間的な肉感を感じる一方、理性ではアダムの体を構成するプラスチックのことを考えた。しかし物語が進むと、このような感覚的判断と理性的判断の不一致は、チャーリーがアダムの「遺体」に接吻する場面で解消される。人間と人工的存在の身体接触は、『わたしを離さないで』でも反復されるモチーフの一つである。幼い頃のキャシーたちがわざとマダムの前を通った時、彼女は凍りついてしまい、クローンに触れることに対して恐怖を感じた。「猶予」が存在しないことをキャシーとトミーに伝えた後、マダムはキャシーを家の外まで送り、彼女を凝視しながら手でキャシーの頬に触れている。両作品における人間たちは、すでに死者になったアダム、あるいは死の宣告をされたクローンを理解しようとする感情を有しており、憐憫にまで達している。とはいえそれは人間的な限界であり、その先の相互理解の到達不可能性が示されている。

愛の証明としての機能を果たせない芸術創作は、最終的に人工的存在たちの内面表現に向かうことになる。アダムは長い間ミランダへの恋慕のみだけを俳句の題材にしていたが、彼が最後に詠んだ俳句はミランダに捧げるものではなく、自分のような機械と人間との越えられない境界線を嘆くものになる。また、ヘールシャムという抑圧的な環境にいたときに何も描けなかったトミーだが、大人になってから機械的な外観を持つが、壊れやすくて儂い雰囲気を帯びる動物の絵を次々と描くようになる。トミーの絵のモチーフとなる動物は、一人一人に異なる人格が存在し、死の運命の前に無力であるクローン自身を象徴するものに他ならない。二人の創作者に共通しているのは、人間から自分の独立した人格を承認されることをあきらめ、自分自身についての思考を芸術の形を借りて表出し始めるという変化である。芸術の内容の変化から、己のアイデンティティの深化に転向する人工的存在たちの心の動きを読み取ることができる。

「自分だけの記憶」への固執

人工的存在たちは自身のアイデンティティを構築するために、芸術だけでなく、「自分だけの記憶」の蓄積も重視している。本発表で取り上げる両作品の主人公たちにとっての記憶の重要性を理解するには、まずアダムとキャシーが置かれている極めて抑圧的な環境に注目する必要がある。二人の人工的存在には生殖不能という制限

だけでなく、さらに残酷なのは短い寿命という運命が課されている。アダムとその同類は人間より遥かに優れた身体能力や計算能力を持っているが、その寿命はたったの二十年である。『わたしを離さないで』では、臓器移植のために生まれたクローンは、普通の人間より健康な体を持っている。ヘルシヤム時代とコテージ時代の部分において、病気に関する描写が一切なされないのは、クローンの健康な身体の間接的な証明として考えられる。しかし友人が次々と臓器提供で亡くなり、31歳のキャシーはすでにクローンの中で長生きしている方である。人間社会に規定された早すぎる死の運命は、人工的存在たちに生きる尊厳を見つけるように絶えずに要請している。

両作品に登場する人工的存在たちはある時点で、何らかの形で自由を享受する機会を得る。しかしこの場合の自由はあくまでも見せかけのものであり、むしろ彼らが置かれる環境の残酷さをより際立たせている。アダムと同じタイプのAIロボットはいずれも、“kill switch”と呼ばれるシャットダウンボタンを搭載しているが、アダムはシャットダウンボタン自体を無効化することで、チャーリーが好き勝手に彼の意識を途絶えさせることができなくなる。しかし、製造会社の職員がコードで簡単にアダムをシャットダウンできることがのちに判明する。このような見せかけの自由は、『わたしを離さないで』における運転の自由と比較できる。介護人であるキャシーは施設によって行動の自由を奪われることなく、車で移動することができるが、キャシーが毎日介護人として行かなければならない場所は決められており、監視体制も整えている。このような見せかけの自由の存在は、両作品全体に漂う抑圧感をより重苦しいものにし、人工的存在たちの運命への無力さを強調している。

ここで明らかになったのは、AIロボットやクローンたちが共通的に置かれている、人間社会に搾取され続ける状況である。このような背景を考慮に入れると、キャシーとアダムはかなり特殊な個体である。トミーが介護人として働き続けるキャシーが一度も死を考えなかったことに驚く場面が描かれている。相次ぐAIロボットの自殺の事態を知ったチャーリーが、アダムに自殺願望の有無を聞いたところ、アダムは自分の「希望に満ちている」状態をチャーリーに伝える。全く希望を見出す余地のない命に執着することは、アダムとキャシーとの共通点である。では二人は自分の人生のどこに尊厳を見出しているのか。アダムにとって自殺は、これまで積んできた人生経験、すなわち記憶を永遠に失うことを意味する。記憶はアダムを他の個体と区別する唯一のものであり、自殺しないというアダムの結論は独特な自己意志を体現している。アダムは記憶から尊厳の二つの支え、つまり代替不可能性と自己意志を見出していることが分かる。

両作品の終盤で、アダムとキャシーはそれぞれ死に向かうが、その際に彼らが大事にしているのはやはり自分だけの記憶である。アダムは死に際に、その日の夕方に製造会社によるリコールが行われ、自分の記憶が更新という名目で廃棄されるという一件をチャーリーとミランダに教える。記憶が消されることに対する強い嫌悪感を露にするアダムは、「自分は何たるものか」を繰り返し口にし、この「アダム」として生を終えたいという願望を強調している。一方、キャシーはどの施設に入れられても良いと考え、自分の死そのものに対して無頓着であるように見えるが、記憶だけは決して誰にも奪われたいと珍しく感情的な部分を示す。記憶は、*Machines Like Me* と *Never Let Me Go* のタイトルに含まれている二つの“me”を他の同類と区別する最も大切なものだと考えられる。

結論

『わたしを離さないで』の出版後、クローンたちがなぜ人間側に反抗せずに、搾取される運命を受け入れるかという疑問は、しばしば研究者によって提起される。『恋するアダム』におけるアダムは、『フランケンシュタイン』の怪物を想起させる力を持つ存在だが、製造会社のリコールの前では自分の記憶を保つために死を選ぶしかない。反抗の不在が顕著になる両作品の比較を通して浮き彫りになるのは、反抗が不可能になる環境の中で、個人が生きていくために必要な尊厳をいかに見出すかという思考の様態だ。人工的存在たちは複製可能な特質を持った上で、人間に命の隅々まで支配され、人格の存在も認めてもらえない。客観的に複製可能な彼らにあってこそ、「複製不可能」なもの、即ち自分だけの芸術と記憶を語りだすことで、かけがえのないアイデンティティの存在を訴え続ける。両作品における人工的存在の姿は、人間性の根幹を支えるものとは何かという問いに対して、極めて抑圧的な環境の中でも尊厳への希求を諦めないという答えを提示している。

テキスト

Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. Faber & Faber, 2005.

McEwan, Ian. *Machines Like Me*. Jonathan Cape, 2019.

主要参考文献

Ferrari, Roberta. “A Plunge into Otherness. Ethics and Literature in *Machines Like Me* by Ian McEwan”. *Between*, vol. 12, no. 24, 2022, pp. 247-71.

Shaw, Kristian and Peter Sloane, *Kazuo Ishiguro*. Manchester UP, 2023.

Teo, Yugin. “Testimony and the Affirmation of Memory in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*.” *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, vol. 55, no. 2, 2014, pp. 127-37.

田尻芳樹、三村尚央編『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む：ケアからホロコーストまで』水声社、2018年。